

スクールカウンセラーにとっての治療契約と インフォームド・コンセントとは

Treatment Contracts and Informed Consent as They Apply to School Counselors

野々村 説 子*

Setsuko NONOMURA

抄 録

筆者は高校のスクールカウンセラーとして、学校の中のカウンセリングルームで精神分析を基本とした個人心理療法の技法である人間存在分析をおこなった。面接を開始するにあたって、筆者はクライアントに人間存在分析の原理と技法を説明する。高校における事例を提示し、専門の治療機関であるB研究所で人間存在分析を開始する時におこなう治療契約とインフォームド・コンセントの実際（神経症レベルのクライアントの場合）を示し、その比較を通して、スクールカウンセラーが学校の中でクライアントとの間で治療契約とインフォームド・コンセントはできるのだろうか、どのような方法が望ましいのであろうかという問題を本稿において検討した。

1. はじめに

最近、精神科領域においてもインフォームド・コンセント（以下IC）をめぐる問題について様々な取り組みがなされるようになってきている^{2,11-13)}。

ICという言葉は、「患者（クライアント）が自らの人権を自覚し、医師（セラピスト）との対等なパートナーシップを追求する中から生まれてきた言葉であり、患者（クライアント）は、他の商品の消費者と同様に、自分にどのような（医療）サービスが提供されるかを予め知り、そのうえでそのサービスを買うかどうかを決定する権利がある」⁶⁾と理解できる。

人間存在分析^{7,8)}による心理療法を開始するにあたって、クライアントに治療（面接）の原理と方法、治療（面接）構造を説明し、一応、クライアントの納得がいったうえで契約をするということは、Freud, S.³⁾が「精神分析概説」の中で、「分析医の自我と患者の弱化した自我は……同盟（契約）を結び、……患者の自我は完全な誠実さを、つまり分析医の要求に従って、自らの自己観察にあらわれるすべての材料を提供し、……一方われわれは、患者の自我にたいして厳格な分別ある態度を守ることを保証し、

* 関西国際大学人間学部

……このような（分析医と患者の間に結ばれる）自我の同盟（治療契約）を基盤として、分析状況は成立するのである」と定義して以来、行われていることといえる{()内は筆者挿入}。そうしないと、精神分析的な方向性を持つ心理療法（人間存在分析）は成り立たないし、治療（面接）を進めることもできない。もし、クライアント自らが治療を求めてきたとしても、実際、どのような治療法なのか、どういう風に治っていくのか、といったことをクライアント自身がきちんと理解しているわけではない。

ところで、“consent”という語が、本来は、“ともに感じる”を意味するラテン語を語源としていることからすれば、クライアントとセラピストとの間で人間存在分析という共同作業を行っていくために、その方法、原理についていかにクライアントに理解・納得をしてもらうのか、ということが治療契約とICにとって中心的課題なのではなかろうか。

筆者は高校のスクールカウンセラー、大学の保健管理センターの学生カウンセラーとして一般的カウンセリングおよび人間存在分析による心理療法を、そしてB研究所(以下研究所)において人間存在分析による心理療法を経験している。

高校(学校)は生徒を教育する場であって、治療をするところではないので、そこで治療的な関わりをもつことには異論^{4,5)}もある。しかしながら、様々な理由により、学校の中でスクールカウンセラーとして筆者が治療的な関わりをもたざるを得ない場合も生じてくる。その際に、クライアントとの間で治療(面接)契約とICはできるのであろうか、どのような方法が望ましいのであろうか。筆者は本稿において、(1)セラピストは契約をするときに最低限どのような事柄について理解しておくことが必要なのか、(2)契約として何を取り決めておくことが望ましいのか、(3)人間存在分析の経過に(1)、(2)がどのような影響を及ぼしうるのかという観点から、高校(学校場面)で人間存在分析を行った事例と専門の治療機関である研究所での治療契約とインフォームド・コンセントの実際(神経症レベルのクライアントの場合)を提示し、その比較を通してこの問題について若干の考察をおこないたい。

2. 高校(学校場面)で人間存在分析を行った事例

事例は、15才で高校1年生のA子で自発的にカウンセリングを申し込んできた。

主 訴：知らないところに行くのが苦手。人を怖く感じることもある。初めてとか慣れていない人に会う時に普通以上に緊張する。

相談概要：小学校の頃から主訴の症状があった。初めて職員室に入る時にドキドキする。どこまで、どう入っていったらいいのかとか、給食の時にお茶を取りに行くと、1番最初に部屋のドアを開けるときにもここでいいのかとか、中がどうなってるのかとかが気になっていた。入った時に間違いをおかさないと気になる。入口が1つしかなくて、そこからしか出られないような建物に入る時も緊張する。しかし、1回経験すると緊張しなくなる。また、小学校の頃から、仲間外れにされることがよくあった。人とうまくいかないのは中学校くらいから段々ひどくなっている。中学2年の時に交換日記をしていた友達3人が、急にA子だけに話しかけてこなくなり、それが2か月くらい続いたことがあった。A子にはその理由が全く分からなかった。理由を知りたかったけれど、「聞くと構って欲し

い気持ちをみせることになるのでみっともない」から聞かなかった。高校に入ってから、クラスに友達がいない。新しいクラスになると、どの人からどう話しかけたらいいのか悩む。最初が肝心、失敗は許されないと思う。まだ相手のことを全然知らないから不用意なことは言えないし、そういうことを考えていると話すことがなくなってしまふ。

A子は「カウンセラーが学校に来ることを知った時からカウンセリングを受けたいと思っていた。他の悩みとも繋がっているようにも思う」と述べた。

既往歴：特になし。

生育歴：小さい頃からしっかりしていたので、弟や妹の面倒を見たりして結構両親から頼られていた。小学校の頃はよくお腹が痛くなって、しょっちゅう保健室に行っていた。

家族：自営業の父親とそれを手伝っている母親。年齢は共に40才代。それに中学生の弟と小学生の妹の5人家族。弟も妹もやらなければいけないことをしないので嫌い。

以上のようなことをインテーク面接で聞いたところで、筆者は、assessment（見立て）として軽症の対人恐怖症で、人間存在分析に適応すると考えた。

本事例では、A子が自らカウンセリングを求めてきたので、特にカウンセリングの必要性については説明しなかった。筆者はくA子さんの年齢では友達とうまくやっていけないということで悩む人は結構多いですよ。A子さんも感じているように、カウンセリングを受けるとよくなると思います、その際、カウンセリングを受けられるところとして、公的な相談機関、神経科クリニック、専門の個人開業の治療機関、それと学校のカウンセリングルームという選択肢をそれぞれの特徴も含めて説明した。するとA子は、「両親にも担任の先生にも言いたくない。理由は言っても理解されないと思うから。私はここで受けます」ときっぱりと言った。筆者がくどうしてお母さんやお父さんに理解されないと思うの？>と問いかけると、A子は「お母さんは高校時代の友達とずっと付き合いが続いている。私は直接会わなくなった友達とは半年以上付き合いが続いたことがないので、お母さんと私は根本的に違う気がするから、私の気持ちは理解してもらえないと思う。お父さんは男の人だから、男の人は女の人とは根本的に考え方が違う気がするから私の気持ちは理解してもらえないと思う」と答えた。そこで筆者は次のように説明した。くA子さんは友達を作りたいのに友達ができない、うまく付き合えない、そのことが今一番A子さんが困っていることなのですね。小学校の頃から友達とうまくいかなかったのですね。それに両親ともしっくりいかない、理解してもらえないところがある、そのこととも繋がっているかもしれませんね。どういう状況で、何がどううまくいかないのかということを見ていって、その辺の状況がはっきりしてくると、つまり原因が掴めたら、次第に誰ともうまく付き合えるようになってくるというのが、カウンセリング(学校の中であり、精神分析とか人間存在分析という言葉は馴染みがうすいので、筆者は先生にも保護者にもカウンセリングという言葉を使っている)のやりかたです。A子さんがさっき私に話してくれたように、色々話して、それを2人してみていくという方法です。こんなことは恥ずかしい、みっともないかは思わないで、どんなことでも話すのがルールです。さしあたり、今、A子さんが友達とかとうまくいかない状況からだと話しやすいかもしれませんね>。同時に、コンフィデンシャルティについても、く2人の間で話題になったことは、私の方から他の誰にも勝手に話すことはしません。どうしても話す必要が生じた場合は、前

もってA子さんにその理由や内容を説明して了解を得るようにします>と面接の方法と原理を説明し、A子も同意した。

次に具体的な面接構造を設定した。原則的に週1回、1時間。突然休むことになった場合は、カウンセリングルームの外に設置しているホワイトボードにイニシャルで記入しておくか、カウンセリングルーム担当の先生(筆者と一緒にカウンセリングルームの運営に係わっていた2人の先生)に連絡するという事になった。

ここで、高校(学校場面)のカウンセリングルームの空間的な構造を述べておきたい。広さは普通の教室よりは少し狭い。部屋の片隅に新品のソファセットが置いてあり(面接は大抵、そこで90度法で行う)、アコーディオンカーテンで仕切るようになっていて、ドアを開けた時に、クライアントの姿は見えないようにしている。他に事務机が4つ、ロッカー、黒板、水道設備等、少々雑然とした感じがする。何よりも筆者が閉口したのは騒音公害である。クライアントが涙ながらに自分の辛い心情を吐露している最中に、突如として「遅刻指導をするので、～の生徒は今すぐ職員室まで来なさい」といった校内放送が侵入して来たり、隣に教室があるので話し声、笑い声等が聞こえてくる。さらに、ドアの外に“面接中”の表示を掲げているが、それでも、教師や生徒等が入ってくることもあった。

面接経過：A子の語ったところは「 」, 筆者が述べたところは<>で示す。

#1～#7 (ほぼ週1回面接を行った。掃除当番等でよく遅刻した)；

A子は今までせき止めていたものが流れだすように次々と語った。A子は「小学校5年の時に、塾の送迎用のバスの中で、私が出入口の近くの手すりに掴まって立っていると、私の嫌いな人が来て、『ちょっとのいて!』と言ってその手すりを掴んだので、私は揺れるバスの中で持つところがなくなってしまい、『ちょっと持たせて』と言ってその人の肩を軽く叩いたところ、『何するの!』とつねられた。バスの中だったので逃げるところもなくすごく怖かった」と述べた。入口が1つしかなくて隠れるところがない場所が苦手なのは、この時の怖かった体験によることが自己認識・自己洞察された(#4)。さらに、A子は次のように語った。#6「今、クラスの中で、誰がというのではなくて、クラス全体の雰囲気として、私に友人がいないからクラスの皆から嫌われている感じがする。先生に質問されて私が間違っただけを言うのと他の人とは違った笑いが起こる」「私が一生懸命に考えて頭の中で組み立てて話したことを、お母さんは口先だけで、丸め込むように、茶化して終わる。私のことを理解してないからそういうことが出来ると思う」。#7「小学校の頃、家族で遊びに行くことになっていた。その時に、私は学校の友達と打合せがあったけれど、そのことは大したことじゃなかったので、友達に頼んで遊びに行くつもりになっていた。なのに、事情を聞いたお父さんに『友達の方に行きなさい』と言われて、私だけが置いていかれた。それ以上言うと、お父さんに怒られる気がして言えなかった。理解して貰えない」。

#8 (学校の行事等のために、1か月ぶりの面接)；

筆者が<久しぶりですね、どうでしたか?>と問いかけても、A子は黙ってうつむいたまま話さずそうとしない。そこで筆者が<どんな風に話しにくいのか>を話題にすると、A子は、「余計なことまで喋るといけないから。人によって喋る内容はここまでと決めている。前に担任の先生が私の言ったことで困った顔をした。聞いて楽しい話じゃないし、話しても理解してもらえないかどうか分からな

いし」と答えた。そこで筆者は、筆者に対する担任の先生転移、両親転移を解釈して、転移性抵抗を除去し、〈何でも、どんなことでも話すというのがカウンセリングのやり方でしょう。そうしないと、本当のところどうなってるのか分からない、明らかにならないでしょう〉と、面接の方法を改めて説明した。

9；筆者が〈1週間、どうでしたか?〉と尋ねると、A子は「特に、別に」と答えた。しばし沈黙のあと、筆者が〈友達、両親、弟妹達とうまくいっているから話すことはないということですか、それとも今までに話していたような状態が変わらず続いているから特に話すことがないということなのですか?〉とさらに問い返すと、A子は「ぱっと聞かれて、ぱっと出る言葉がなかったから。考えても気のきいた言葉が出てこないのだったら、ぱっと答えるにこしたことはないと思うから」と答えた。〈ぱっと答えなくてはい!とか、気のきいたことを言わなくてはい!とか考えてしまうんですね。そういうように気がきくように、恰好よくと構えてしまうのですね。カウンセリングでは思い浮かんだことを思い浮かぶままに話せばいいんですよ。それがルールだったでしょう〉と筆者が説明するのを聞きながら、A子の目に涙が溢れでてきた。筆者に accept, support され、理解してもらえたと感じたからであろう。

9～# 11 (両親、弟妹とA子との関係が話題の中心になった)；

A子は「両親は弟や妹が怠けて宿題をしてなくて、その為に家族で出掛ける予定だったのに、弟達に合わせて取り止める。怠けてる自分が悪いんだから置いて行けばいいという私の意見を無視する。私のことを全く理解しようとしなない両親にも、怠けて人に迷惑をかける弟達にも腹が立つ。でも、両親も弟達も、私とは基の考え方が違うから、私のことを分かるはずがない」と感情を込めて話した。

11～# 14まではA子のクラブ等の都合で面接はほぼ月2回のペースとなった。

12～# 13(A子と周囲の人たちとの関係について、A子が認識できるようになった)；「学校の先生で、私がまあ信用できると思っていた先生に嘘をつかれた、誤魔化された。どうしたらそういうことを見抜くことができるのですか?それを見抜けなかった自分にも腹が立つ」と泣きながら訴えた。筆者はその場面を“劇画を描く”⁷⁾のように具体的に聞いていって、先生は怠けているクラスメートに合合わせて、頑張っているA子のことを分かってくれない、理解してくれないとなっていることが明らかになり、先生とクラスメートに対する両親、弟妹転移をA子は自己認識・自己洞察した。

14 (クラブ活動のために30分の面接となった)；「カウンセリングルームに来てる人達とは話ができるけれど、クラスの人達とは何で話せないのか考えた。クラスの人達とはトイレに行く時とかも、いつも一緒にいないといけない。そういうのが私は嫌。ここに来ている人達とはここだけ。私はそういうことをしないから仲間に入れないのだと分かった」

15(2カ月振りの面接)；A子は「試験とクラブでずっと忙しかった。今度の約束はもういいです。クラスの中で私の居場所が変わってきた。話せる人ができてきた。仕事とはいえ、先生が私のために時間をさいてくれたのが嬉しかった。それに考え方が変わって、今まではまだ相手のことを知らないうちに親友のような関係を求めていたから、相手にもっともっとと求めてしまった。ちょっと話をするだけの友人も、それはそれでいいと思えるようになった」と述べた。友人との問題も自分で解決できるようになったので終了とした。

面接に要した期間は9か月であった。

3. B 研究所における治療契約とインフォームド・コンセントの実際

(1) インテーク面接：

まず、来所した理由（主訴、症状）を聴き、それが“いつから”“どのような状況”で始まったのか（現病歴）を詳しく聴き、次に家族歴、生育歴を丁寧に聴いていく。これらの作業が2～3回かかることもある。

(2) assessment（見立て）と治療契約のプロセス：

心因性のものであると assessment（見立て）が付き、人間存在分析の適応であると判断すれば、治療技法と原理を説明する。たとえば、「あなたは別にノイローゼになろうとしてなったのではありませんね。一体、何が、どうなってノイローゼになってしまったのか？、ということを見ていって、その間の事情が明らかになれば、つまり原因が明らかになれば症状は治るという治療法です。ですから、症状が始まった頃の状況から詳しくありのままを話していきましょう。私の方からあれこれ指示したり助言をしたりはしませんし、面接時間以外に会って相談にのったりもしません。当然、あまり話したくない事もあるでしょうが、すべてを話していただかないと原因が分かりませんので何事によらずそのままを話してください。もちろん、ここで話されたことは家族の方にも誰にも、貴方に無断で話すことはありません」と。クライアントから治療（面接）の見通しや治療期間、あるいは他の心理療法に関する質問など、治療（面接）を受けるに際してのクライアントの質問には、できるだけ丁寧に、クライアントの納得がいくように答える。このような過程を経て、クライアントが治療を受けたいとの同意・承諾があれば、治療（面接）構造の設定をすることになる。

研究所の空間的な構造は、クライアントと2人だけの個室で、適当な広さがあり、各部屋には窓がある。テーブル、椅子、カウチ、時計、壁には絵が飾られている。クライアントによって、あるいは面接の流れの中で、90度法、対面法、自由連想法、いずれも常に適切な方法を選ぶことができる。ドアの外側に面接中、あるいは空き室を示す表示をしているので、誰かが面接中に入ってくることはない。

次に、週に何回、何曜日の何時から何時まで、1回の治療費と支払いの方法、休む時のお互いの連絡の仕方を決めて契約する。そして、再度治療（面接）の方法と原理の説明を行う。この時には、クライアントが治療（面接）の中で満たされなかったことを別の形で満たすことをしないこと、結婚や就職など重大なことがらの決定などは可能な限り避けた方がよい事なども説明して、治療を始める。

4. 考 察

(1) セラピストは治療（面接）契約をするときに最低限どのような事柄について理解しておくことが必要なのか

治療（面接）契約をする場合の重要な要件の1つに治療（面接）構造の設定がある。

小此木⁹⁾は「治療構造という概念は、精神療法というものの、われわれが患者とお互いに出会う過程で2人のそれぞれの主観的な意識をそれに先んじて越えて、2人の関係を規定しているような基本的条件です。……精神療法の1つの基本的な条件として、安定した空間的構造の中で2人の人間がコミュニケーションを続けていけるかどうかということが、もっとも重要な要因である……ふだんわれわれが、一定の医療的な場面の構造によってどんなに守られているかということを、よく認識しておく必要がある」としている。研究所は専門の治療機関であり、治療を行うことが最優先されるので、前述のとおり落ちついた雰囲気であり、面接中に外から“音”も“人”もほとんど侵入してくることはない。小此木のいうところの“守られている”場面構造であるので、セラピストもクライアントも共に治療（面接）に専念することができる。

学校の中では面接のルールより、クラブ活動や試験などの学校のルールが優先される。学校の中の面接構造では、突然の校内放送や、話し声、笑い声、誰かが間違っ入ってくる等を制止することは難しい。筆者は内心、にがにがしい思いをしたり、ひやひやしたりして面接に専念できないことがあったが、おそらくはA子も同様の事を感じていたのではなかろうか。

また、研究所では、クライアントから直接治療（面接）費を受け取ることが多い。直接お金を受け取るということは、セラピスト側にとっては治療（面接）に対する責任をより強く感じるようになるし、クライアントの方もお金を払うことで治療（面接）に対する意識や意欲が高まるといえる。あわせて、時間の変更や休む場合の支払いはどうするかということもきちっと決めないと支払いに関係してくるので、必然的に治療（面接）契約が明確になる。

一方、高校では直接お金を受け取ることはいし、学校のルールを優先することになるために、1回の面接時間も回数もまちまちであった。このように面接の条件が不安定であると面接を規定する要因が複雑になって、セラピストはクライアントの変化や面接の流れ等を読み取りにくいし、クライアントも面接に対する意識が弱まったり、気持ちの切かえがスムーズにいかなくなることもあると思われる。

以上のようなことから、筆者は学校の中では、契約というより面接の“約束”をするのであり、狭義の治療的な心理療法を行うのは“約束”を守ることができる神経症レベルのクライアントに限った方がよいと考えている。そのためにはスクールカウンセラーはきちんと assessment（見立て）をする能力が要求されると思う。そのうえ、学校の中は必ずしもスクールカウンセラーやカウンセリングに理解のある人達ばかりではないし、面接の経過の中で激しい行動化が起こったりすると、その対応は難しいし、場合によってはスクールカウンセラーの立場を危うくしかねないということも起こりうる。

こういった事柄について理解しておいたうえで、面接の“約束”をすることが大切と考える。

(2)約束として何を取り決めておくことが望ましいのか

A子は、自分がカウンセリングを受けることを「両親にも担任の先生にも言いたくない」、つまり“秘密にしてほしい”と筆者に訴えた。高校生の場合には、こういう訴えをする生徒にとときき出会う。

村本⁶⁾は「confidentiality は本来は、秘密を打ち明ける側の信頼に根拠をおく情報のあり方なの

である。それに基づいてはじめて、打ち明けられた側は、自分に寄せられた相手の信頼を裏切らず、秘密を守ることが求められる。つまり、『守秘』は決して confidentiality の本来の意味ではなく、そこから結果として生じてくる意味である」と指摘している。

A子は筆者を信頼して、両親にも先生にも、今まで誰にも話したことがない秘密を筆者に語った。この時に筆者がA子の訴えを退けると、面接関係そのものが成り立たなくなる恐れがある。そこで筆者は、＜面接をおこなっていく中で、どうしても両親や担任の先生に知ってもらわなければならない必要が生じた場合は、連絡をすることがあるかもしれない＞が、その際にはA子の意思を尊重し、筆者が勝手にA子が語った内容を誰かに話すことはないという約束を取り決めた。つまり、コンフィデンシャリティの限界と責任のあり方を明確にしておくことは、セラピストを守るためというより、クライアントを守るために必要なことと考えている。

本事例の場合は、筆者はカウンセリングルーム担当の先生方には、A子のプライベートな内容は話さずに、外的状況を説明して連携を保つように心がけた。

研究所は有料であるので、保護者に治療費を出してもらおうクライアントの場合は保護者に秘密で治療（面接）を受けるということにはなかったし、治療（面接）を優先するので、学校のような問題はほとんど起こらない。

(3)心理療法の経過中に(1)、(2)がどのような影響を及ぼしうるのか

中野^{7,8)}は、人間存在分析による治療の経過には、かなり複雑な様相を呈したり困難に直面するが、その原理と技法をセラピスト自身もしっかり自己確認し、クライアントにも、その枠組み、方法、ルールなどについて最初に十分に説明して理解・納得しておいてもらうことが、分析（面接）を進めていく上での不可欠の前提条件であり、「一定の日と時間と方法、ルールの中で治療を行うという枠組みがあつてこそ、明確に『抵抗現象』『転移現象』などを確認し解釈することができ、ルールに則って治療を進めていくことができる」と述べている。

A子は#8で、筆者が話しかけても話さずとしなかった。そこで、筆者に対する担任の先生転移、両親転移を解釈して、転移性抵抗を除去し、＜何でも、どんなことでも話すというのがカウンセリングのやり方でしょう。そうしないと、本当のところどうなっているのか分からない、明らかにならないでしょう＞と、面接の方法を改めて説明した。#9では、沈黙がちなA子に対して、筆者はくぱっと答えなくてはい！とか、気のきいたことを言わなくてはい！とか考えてしまうんですね。そういうように気がきくように、恰好よくと構えてしまうのですね。カウンセリングでは思い浮かんだことを思い浮かぶままに話せばいいんですよ。それがルールだったでしょう＞と *acceptive, supportive, empathic* な態度で面接方法にからめてA子の性格抵抗を解釈した。

このように治療（面接）経過の中で必然的に起こってくる『抵抗現象』『転移現象』を、最初に契約した「治療（面接）方法にからめて抵抗解釈、転移解釈をすることは、クライアントにあらためてルールを知らしめることになり、共同作業がしやすくなり、なによりも治療（面接）を進めていくことを可能にする」と、中野⁸⁾が述べているように、最初にきちんと面接のルールについて“約束”を取り交わしているかどうかということが、面接を進展させる基本であると筆者は考えている。

このことは、インフォームド・コンセントにおける“イベントモデル”と“プロセスモデル”¹⁾の

概念を比較検討して、「精神療法におけるインフォームド・コンセントは，“プロセス”として考えていくべきであり，持続的に更新されていくものである」という尾久¹⁰⁾の主張にも繋がっていると思う。

A子の場合，学校のルールが優先されて“約束”がしばしば破られることになったが，軽症の神経症であったので，そのことが問題にならずに，自己認識・自己洞察がすすんで終了となった。

5. おわりに

筆者がスクールカウンセラーとして高校（学校）の中で心理療法（人間存在分析）をおこなった事例と専門の治療機関での治療契約とICの比較をもとに，高校（学校）の中で治療的な関わりを持つ場合の問題点について，3つの観点から検討した。

参考文献

- 1) Appelbaum, P. *et al.*: “Informed Consent : Legal Theory and Clinical Practice” . Oxford University Press, 1987. (杉山弘行訳：「インフォームド・コンセント臨床の現場での法律と倫理」文光堂 1994)
- 2) Everstine, L. *et al.*: “Privacy and Confidentiality in Psychotherapy” . Am . Psychol, 35, 1980, pp. 828 - 840
- 3) Freud, S.: *Abriss der Psychoanalyse*, 1940. (小此木啓吾：「精神分析概説」フロイト著作集．第9巻，人文書院 東京)
- 4) 河合隼雄他：「＜座談会＞スクールカウンセリングの現在」『精神療法』，24 (2) 1998 102 - 117 頁
- 5) 國分康孝：「スクールカウンセラーの機能と役割」『精神療法』，22 (4) 1996 373 - 380 頁
- 6) 村本詔司：『心理臨床と倫理』朱鷺書房 大阪 1998
- 7) 中野良平：『精神分析の技法』金剛出版 東京 1991
- 8) 中野良平：『精神分析のスーパーヴィジョン』金剛出版 東京 1993
- 9) 小此木啓吾：『精神分析セミナー I』岩崎学術出版社 東京 1981
- 10) 尾久裕紀：「精神療法におけるインフォームド・コンセント」『精神分析研究』，40 (2) 1996 77 - 86 頁
- 11) Pope, K. *et al.*: “Malpractice in Outpatient Psychotherapy” , Am . J. Psychother, 32, 1978 pp. 593 - 602
- 12) Smith - Bell, M. and Winsdale, W. J.: “Privacy, Confidentiality, and Privilege in Relationships, Amer. J. Orthopsychiat, 64, 1994, pp. 180 - 193
- 13) 辻 悟：「精神医療におけるインフォームド・コンセント」『精神分析研究』40 (2) 1996 87 - 93 頁
(参考文献としては記載しなかったが，精神分析研究 40 (2) 特集「インフォームド・コンセント」の他の論文も参照した)

Abstract

The author, acting as a counselor at a senior high school, provided psychoanalytically oriented Humanbeings-Analysis to female student when she met with them in the school's counseling office. She initiated Humanbeings-Analysis by explaining to them the approach and methods she would use. This paper reviews this explanation and also discusses the issues of drawing up treatment contracts and obtaining informed consent. The steps taken at the beginning of Humanbeings-Analysis at the B Institute of Psychoanalysis (a facility providing expert treatment) when working with clients with neuroses or related conditions are compared with the practices that the author used in the high school counseling office. The author then discusses whether it is possible for school counselors to draw up treatment contracts with high school aged clients and obtain informed consent from them during their counseling services at school. The author discussed the best methods for establishing treatment contracts and obtaining informed consent in school counseling offices.